

2025年6月22日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教41「救い主はどこへ」

イザヤ14：3～8、ヨハネ7：32～36

「あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」（34節）イエスさまは自由です。それゆえイエスさまを見つけたり、捕まえることができません。ここにイエスさまの神さまとしての本質が表れているように思います。カルヴァンが書きました『ジュネーヴ教会信仰問答』の中で十戒の第二戒「刻んだ像を作ってはならない」について次のような問答があります。「何ゆえ神を、見える形に表わすことが、全く許されないのですか。答 霊なる、永遠の、知りえざる神と、生命なく、朽つべき、目に見える有体物との間には、何らの一致もないからであります」（問145）神さまとわたしたち人間との間には何らの一致もないと言います。本来、わたしたちはイエスさまを見つけられない、捕まえられないのです。

もともと人間は良いものとして神さまによって造られました。そこには神さまとの一致点があったのでしょ。しかし善悪の知識の実を食べてから、その一致点は失われました。人間は神さまから離れ、己を神として、その愚かさゆえにすべてを把握し支配できるかのような錯覚を抱きます。カインのように命を奪い、バベルの塔のように天まで届く塔を建てようとする驕りが生まれます。そのような神さまの領域への侵害は、人に対しても表れてきます。相手の領域へ平気で足を踏み入れる。戦争などはその最たるものですが、そういうことがあらゆる暴力、ハラスメントを引き起こします。そのようなわたしたちと神さまとの間に一致点などあるはずもありません。そこには深い断絶があり、そこにイエスさまを捕らえられない一番の理由があります。

少し前でしたが、テレビでスペインのバルセロナにありますサグラダファミリア教会のことを取り上げておりました。外尾悦郎さんという日本人の彫刻家の方が建築に携わっておられますが、現在、建物の中心部、メインタワー「イエスの塔」を建設中だそうです。外尾さんは番組の中で、イエスという人はどんなところも通り抜けられる、人の心、国境、人種、あらゆる隔てをすり抜ける。そこから境目のないものをイメージしてイエスの塔の建設をしていると話されていました。どんな塔になるのか楽しみです。このすべてを通り抜けていかれるというところに永遠なる神さまの自由があります。それゆえに罪を抱え、限界を抱えている人間が把握することも、手中に納めることなどできないのです。それがわたしたちの限界です。

その限界をユダヤ人たちの反応がよく示しています。「ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか」（35節）イエスさまを人間的な感覚の中でしか捉えきれないゆえにこのように言うのです。ここには「ディアスポラ」という言葉が使われています。これはバビロニア捕囚後、各地に離散したユダヤ人たちを示す言葉です。彼らは異教の地に住み続け、やがてその土地の人と同化していきますから、生粋のユダヤ人からするとそこには軽蔑、ある種の差別意識のようなものがありました。イエスさまはどこに行かれるのか。やがて落ちぶれて異教社会に逃亡して行くのだろうと彼らは理解しました。

しかし、このような軽蔑した言葉が、凶らずも現実のものとなりました。彼らの意図とは無関係に、神さまの救いは異邦人へ、異教社会の中へと浸透していきます。ちょうどペンテコステの時に、様々な国の言葉で福音が語られたように、世界中に福音が広がりました。わたしたち

の国にも福音が伝えられます。「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」(マタイ24:14) そのように福音は何の束縛もなく自由に広がっていきます。この自由さを可能にするのは何でしょうか。

それが、イエスさまの昇天です。イエスさまは「自分をお遣わしになった方のもとへ帰る」(33節)と言われました。それはイエスさまが天に昇られることを意味しています。天に昇られるというと、どこか遠くに行かれることをイメージされるかもしれませんがそうではありません。天に昇られることで、イエスさまはまことの神さまとして、より普遍的な存在であります。まことの人であられた時は限定的でした。ユダヤ地域限定です。けれども天に昇られて、まことの神さまのもとへ帰られる時に、その存在はあらゆる国、人種を超えて、すべての人に及ぶのです。先ほど、イエスさまは捕まえられない、通り抜けられるという話をしましたが、まさにそれがイエスさまの昇天によって可能になるのです。

『ハイデルベルク信仰問答』でも、イエスさまの昇天について教える中で「キリストは、まことの人間でありまことの神であります。この方は、その人間としての御性質においては、今は地上におられません、その神性、威厳、恩恵、霊においては、片時もわたしたちから離れてはおられないのです」(問47)と告白します。このイエスさまのまことの神さまとしての御性質によって、わたしたちもまた神さまとつながることができ、神さまの御支配に生きることが可能になるのです。それは自由になること。イエスさまのように捕まえられない、通り抜ける自由さに生きるということではないでしょうか。

今の時代は、自由がない、ますます窮屈になっているように感じます。かつて自由と民主主義を掲げていた国が、今は人々を力で押さえつけています。戦争の脅威に人々が脅かされています。人々はAIやネットに支配され翻弄されています。自由とは何でしょうか。民主主義とは何でしょうか。ではそう言うあなたはどうか。自由に生きていると言えるのか。通り抜ける自由があるか。そう問われれば心もとない。口先では自由、自由と言いながらも、いろいろなしがらみや、この世の価値観に縛られています。ではどこに自由があるのか。それはすべてを通り抜けられるイエスさまの中にあるのです。わたしたちはイエスさまへと解放されるのです。

そして、ここで覚えなければならぬのは、この自由へとわたしたちを召されるために、イエスさまは捕まえられた。捕まえられてくださったのです。本来ならば通り抜けられるお方がそうされなかった。捕らえられ、十字架で死んでくださいました。それによってわたしたちを捕らえている罪を滅ぼし、三日目によみがえられて、その罪の労役からわたしたちを解放してくださいました。「ああ、虐げる者は滅び、その抑圧は終わった。主は逆らう者の杖と支配者の鞭を折られた」(イザヤ14:4~5)この預言者の言葉はイエスさまによって成就しました。わたしたちが自由を取り戻す道はこのイエスさまにしかありません。

天の父よ。なかなか自由に生きられません。通り抜ける自由も勇気もありません。だからこそイエスさまがまことの人となられ、あの十字架ですべての罪の支配を断ち切ってくださいました。そしてよみがえりの命を持って、真の自由へと召してくださいます。イエスさまに結ばれて、その自由を得ていることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。